

肝臓病

近頃めっきり酒量が落ちた
と思っただら今度は食欲も落ち
みるみるうちに激ヤセし
おまけに顔は黄土色と化し
ただならぬ心配
過去何度か繰り返している悪性リンパ腫の再発
とはいえ好きなアルコールを止めることなく克服し
今度再発しても治療はしない
と宣言しているので安易に
診てもらおうよ
とは云えない

少しの間だけでも酒をやめて

肝臓の検査でもしてもらったら？
と促すが

肝臓の薬をもらって飲みゆう
痒いのは猫のノミのせい
身体が黄色いのはミカンの食べ過ぎ
と得手勝手解釈を云ってきかない
その後もタイミングを見計らって
受診を勧めるが耳を貸さない

いよいよ食事も摂れなくなり黄疸も
ただならぬ色彩に染まる
それでも病院を嫌がる父に

女房は借りれなかった耳に

お義父さん

そしたら**病院にお義父さんの知り合いの

**さんが入院されているでしょ

そこで診てもらいませんか？

という提案にやっと乗ってきた

ところが

悪性リンパ腫の病歴があることで

かかりつけの医大に行くよう云われる

それを聞いた父は

もうえい、いかん！

宥めてくれる看護師さんを見無視し

家へと帰る

医大ではリンパ腫専門の医師は

週二日しかないが丁度その日が外来日と判明し

一旦家でくつろいでいる駄々をこねる父を

強引に連れて行った

りぐりつづける父を見ながら

医者は女房の貸し出し無制限の耳に

よく連れてこられましたね

と感心し肝臓病だから専門部門に回すので
と手配してもらおう

緊急胆管ステント術が必要な説明を

父は致し方なく受け入れ

数日後の入院が決定

退院日の予測をしつこく確認した。

ステント術

肝胆管のステント術をしてから
皮膚の搔痒感を含め
全身の黄疸は随分と和らぎ
食事も半分くらい食べられるようになった

医師は

今のところ順調に回復しています
ビリルビン値が一気に下がっているし
うまくゆけば抗癌剤の投与も
検討できるかもしれませんし
延命も期待できるかもしれません
外泊をして様子を見ましょう

これはすぐに退院だな
という奇妙なけだるさの感触が響く
今の父の体力を考えると
外部のサービスを受けつけないのは
火を見るより明らかなので
隣に住むほくらがどれだけ
火中の栗を拾えるか
が問われている

一泊の外泊でさえ
父と付き合っているとヘトヘトになる
ほくらの在宅生活の心配事を
医師に告げたところで
意に介することなく

駄目ならまた再入院を

案の定

外泊から帰るとすぐに
退院の運びとなる。

束の間の退院

在宅生活は困難を極めた

食事は一日一食

ポータブルトイレを寝室と居間に据え

二階の寝室の昇り降りに見守りが必要となった

食事に手を付けなくても僅かだが焼酎を煽り

煙草をくゆらせる

医師は

歳も歳だしお好きなように

切除し切れない場所に悪いものがあるので
手術はできません

と選んだことばから

「告知済み」

とある

父は一向

癌

という認識はない

のかとぼけているのか計りかねた

見舞い客に対し

よくないものがあつてチューブを入れて
外に出しゆうと
まっことえいもんが今は出来ちよらあよ

と云いながらも顔は喜んでいない

どこかで悟りながら同時に

直面化を避けているのだ

あの手術はしよううるさかったわよ

もうちよつとはように病院へ行つちよつたら良かった

と云うのだが

ほくらが無理を強いて連れて行ったことは

苦々しく思っている

土俵際で残し

押し戻した力士が

また押し返され
たわらで踏ん張る力士が
父に乗り移ったかのように
止まっていた搔痒と黄疸が
夕暮れのように染まり始める

次の診察日

少し早めてもらっていた
待ちどうしかったその日
何とか持ちこたえた父を
ぼくは戦場に出る覚悟で
連れて行った。

二度目のステント術

父の道案内で

あちこち張り巡らされた迷路のような部署をまわる
周辺から
キヤーという叫び声

採血の検査室でよろめいて転ぶのを
咄嗟に手をさし出し食い止める
こういう所だから
こういった風景は慣れているだろう筈なのに
それほど無残な父の倒れ方

どう考えても最早

単身の地域生活は不可能と判断し

妻は今月一杯の辞職を決めている

これからの地獄への階段を

下ってゆく首根っこを掴まれているぼくの風景を

ぼく自身が眺めている

外来の待合室で待っているぼくらをよそに

父の主治医の診察室は

医師は突然駆け足で走り去ったり戻って来たりを繰り返す

その挙動不審の姿に

奇妙だなあ

といぶかしがりやたらと待たされたあとで

やっと呼ばれる

医師はこちらの事情を聴くこともなく

開口一番こう告げる

せっかく改善の兆しがあった黄疸や肝機能が

また悪化しています

もう一度再入院していただき

ステント術をしましょう

今度はもっと高価で丈夫な素材を使いますから

驚いたことに父は

駄々をこねなかった

あれもせんといかん

これもせんといかん

こっちの事情もある

家に入っても入院しても光熱費は払わんといかん

誰が払うと思うちゅうぞね

新聞も止めんといかん

猫の餌に屎尿のあつらえ

どればあ大変か分かっちゃうかね

医師から見ればどうでもいい話を

もったいぶっては力説し

最後は医師が諦める

これが父の常套手段だったというのに

わずか十日で再手術となるのなら

何故最初からその素材を使わないのか

と憎々しく思いながらも

ぼくは再入院できる喜びに安堵している

帰って今日の出来事を妻に報告すると

同じ説明を入院していたお義父さんのとなりの

患者さんにもしていたわよ

その患者さん

がっかりうなだれていたわ

そう云って

ぼくを驚かせた。